

秋田県の北部は、日本で最も重要な鉱産地域として長い歴史があり、千年以上も前に操業していた鉱山もいくつかある。他の地域では金、鉄、鉛、亜鉛が採掘されてきたが、この地域では、銀と銅が露天掘り鉱山で採掘された主要な金属であった。この露天掘り鉱山は、発盛鉱山と呼ばれた。

八峰町で銀が発見されたのは、隣の能代市の着物商人、工藤甚三郎の功績によるものである。1880年代後半、工藤氏が金属パイプの灰を落とそうと岩でキセルを叩いたところ、岩の中に見えた貴金属の輝きに気づいたと言われている。2年後、銀山が稼行され、1907年には、銅鉱石を精錬するための溶鉱炉が近くに建設された。

1908年に、この銀山では1,365人が雇用され、年間5,000 kg以上の銀が生産され、当時の日本最大の銀山となった。しかし、20世紀の前半にかけて操業は衰退し、最終的に1952年に閉山となった。溶鉱炉は1989年まで操業を続け、他の鉱山の鉱石を製錬していた。

操業時は、発盛鉱山の採掘と製錬事業により、何トンものスラグと粉碎された黒い岩が発生した。これらは近くの海岸で処理されたが、その過程で砂は徐々に黒くなっていった。鉱山の近くのビーチは、今も独特の色をしている。

発盛鉱山がかつてあった場所は、八峰町中央公園として2008年に開園した。芝生広場の一角には、高さ4.3メートルの黒と金の記念碑が建てられている。これは、溶鉱炉の大煙突の10分の1の大きさのレプリカである。